

「市民が夢と希望を持てる まちづくり」に向けて

はじめに

豊かな自然にはぐくまれた五泉市は、新潟県のほぼ中央、県都新潟市の南東約25kmに位置しています。市の東側には阿賀野川、中央に早出川、西側に能代川が流れる肥沃な地域です。また、市の三方は、登山でにぎわう白山や菅名岳などの山地、丘陵地に囲まれています。本市は、平成18年1月1日に旧五泉市と旧中蒲原郡村松町の1市1町が新設合併し、新生「五泉市」となりました。

五泉が誇る特産品

五泉といえば織物のまち、ニットのまちといわれるほど、まちを築き、まちとともに成長してきた繊維産業が、農業とともに市の基幹産業となっています。

その一つ織物工業は、江戸時代に袴地「五泉平」を織り出したのが始まりです。絹織物に最高の環境といえる豊かな水資源と適度な湿度を利用し、全国で3本の指に入る白生地産地として名をはせました。最近では、洗えるシルク製品を開発するなど、新たな活路を見いだしています。

織物と並んで目覚ましい発展を遂げたのがニット産業です。五泉ニットの成り立ちは、戦前からの絹織物、真綿加工、養蚕の時代から、戦後は真綿を撚ってチョッキをつくるラップ業へと変わり、メリヤス横編み機技術導入と縫製技術が相まって五泉のニット産業が興隆し、日本一のニット産地となりました。

もう一つの基幹産業の農業は、水が豊富で肥沃な大地から多くの農産物を生み出しています。稲作

は、この豊富な水が命であり、良質な五泉郷米の生産は、農業の中心を担っています。

また、新鮮で味わい深い路地野菜は、県下有数の生産基地として有名です。中でも、さといもは「帛乙女」の名で知られ、きめ細やかな白肌と独特のぬめりで市場の評価も特に高く、消費者から好評を博しています。

ほかにも、レンコンは地肌の白さと歯ざわりの良さが、キウイフルーツはビタミンの豊富さと糖度の高さが、ねぎは「やわ肌ねぎ」の名で、それぞれ品質の高さが知られています。

彩のまち、春花シリーズ

繊維産業が基幹産業であることから、「彩のまち」とたとえられますが、近年では、水芭蕉、チュー



3haの畑一面に広がる150万本のチューリップ

リップ、桜、ほたんなどの花々が咲き誇るまちとしても有名です。3月下旬には、水芭蕉公園で清楚な白い花たちが一足早く春の訪れを告げてくれます。4月中旬には、日本さくら名所100選に選ばれた村松公園の3000本の桜が見ごろを迎え、らんまん咲き乱れる幻想的な風情が見る人を酔わせます。4月下旬になると、一面花のじゅうたんとなる果本地区のチューリップも有名で、毎年150万本の色とりどりの花に囲まれて「五泉市

チューリップまつり」が行われます。

5月には東公園内の「ぼたん百種展示園」で120品種、5000株のぼたんが美しさを競い合うように大輪の花を咲かせ、人々の心を弾ませ、上旬に行われる「五泉市花木まつり」には、全国から毎年多くの人が訪れます。このぼたんの生産量と出荷量は、共に国内で1、2位を争うほどで、五泉市が誇る特産品の一つです。

清流のまち

五泉の名峰「菅名岳」には、樹齢300年余りのブナの原生林が生い茂り、そのふもとにいたるところから清水が湧き出ており、「胴腹清水」や「吉清水」が特に有名です。「胴腹清水」は、その名の通り菅名岳の中腹から清水が湧き出しています。そしてこの水は地酒づくりに利用され、毎年1月に行われる



菅名岳の中腹から湧き出る「胴腹清水」

本市では、「人と自然が織りなす創造都市 五泉市」を将来像として位置付け、平成19年度から第1次総合計画前期計画を推進してきました。この間、生涯スポーツの拠点となる村松体育館や高齢者の憩いの場として村松老人福祉センターを建設するとともに、学校給食施設に自校方式を取り入れ、地産地消を通して子どもたちが「食に

関する知識、食を選択する知識、正しい食習慣」を身につけるための食育にも力を注いできました。これらは、常に市民の意見に耳を傾け、共に知恵を出しながら進めてきたもので、本市が進める「地域のことば」が決め、地域が担う」という市民との協働のまちづくりが着実に実を結んでいるところです。

そして、平成24年度からは、新

たに後期計画がスタートします。これまで積み重ねてきた市民との協働のまちづくりの形をさらに確固たるものとし、より良いまちづくりのため、市民と力を合わせて取り組んでまいります。

皆さん、四季折々の豊かな自然やおいしい食、そして何より五泉市民の温かさに触れてみませんか。ぜひ一度、五泉にお越しください。

プロフィール

- ◆ 面積 351.87km²
- ◆ 人口 5万5531人
- ◆ 世帯数 1万8344世帯

〔将来都市像〕人と自然が織りなす創造都市 五泉市
〔まちの特徴〕四季それぞれに彩り豊かな安らぎある自然の中に、にぎわいと活力があふれる元気なまち

〔市町村合併〕平成18年1月1日、旧五泉市、旧村松町の1市1町が新設合併

〔特産品〕絹織物白生地、ニット製品



五泉市長 伊藤勝美



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

変革を求め市民が主役の 魅力あふれるまちづくりを

はじめに

平成17年2月13日に上野原町と秋山村が合併して誕生した上野原市は、山梨県の最東部、首都中心部から約60〜70km圏内に位置しています。地域内を流れる桂川、秋山川、鶴川、仲間川およびそれらの支流によって形成された河岸段丘が住民生活の基盤を成しており、山岳・段丘、河川が作り出す美しい自然環境の中に、多くの歴史や文化が息づいています。

旧上野原町は、甲州街道の宿場町として発達し、史跡、神社、仏閣などの貴重な歴史的遺産が多く見られ、現在も旧街道筋の町並みに宿場や一里塚など昔の面影をとどめています。近年では、中央自動車道の上野原インターチェンジ供用開始、甲武トンネル開通など、

交通環境の改善が図られるとともに、2つの工業団地造成、大学誘致、大規模ニュータウン建設、5つのゴルフ場建設など、民間活力を導入した大規模プロジェクトを積極的に推進してきました。

また、旧秋山村は、秋山川に沿うように幹線道路である県道が走り、雛鶴神社をはじめ伝説を秘めた史跡や、文化財の「無生野の大念仏」など、大自然の中で四季折々の楽しみを見つかることのできるアウトドアリゾートなどを目的として首都圏から多くの人々が訪れています。近年は、豊かな環境づくりと交流基盤の整備、安心と思いやりのある地域づくり、新たな時代を開く人材育成、活力ある産業振興など、住民参加による地域づくりを積極的に推進してきました。上野原市では、こうした旧町村

の特徴を踏まえ、地域資源を生かしながら、豊かで安心して暮らせる社会を実現することをまちづくりの基本としています。

安全・安心のまちづくり

本市は、災害に強いまちづくりや防犯体制の強化、生活環境の整備などの施策を推進するとともに、自然環境豊かな地域としてその保全や地域における省エネルギーの取り組みを行っています。また、東海地震や南関東直下型地震、活断層による地震などの広域災害に備えるため、各地域における防災マップの作成支援を行い、地域力の向上を図っています。既に全地域のマップは作成されましたが、これまで希薄だった防災に対する住民の意識が、その作成過程で確実に醸成しています。



毎年9月に行われる牛倉神社例大祭。山車も繰り出される

医療・福祉、子育て支援

医療・福祉の充実としては、これまでの相互扶助により担われてきた子育てや高齢者介護などを社会全体で担い、社会的弱者の生活支援を含めた地域のセーフティネットの構築を図っています。次世代を担う子どもたちの健やかな成長と、子育てをする保護者の経済的な負担を軽減することを目的に、「子ども医療費助成制度」の対象年齢を県内で初めて中学3年生まで拡大し、「出産奨励祝金」の支給対象を拡大しています。また、医療に関しては、市立病院における指定管理者の導入により医師の確保を図るとともに、現在、さらなる医療環境の充実を目指し、新

病院の建設を進めています。

教育の充実

教育の充実として、情報化時代にふさわしい教育環境の充実や生涯学習スポーツの振興、地域文化の保存・普及を進めます。それとともに、児童・生徒の減少に伴い、集団活動における教育や学校行事・部活動など多様な学習形態の機会が失われていることから、学校の適正配置を進めるとともに、ハード・ソフトの両面で体制の充実を図っています。

生活基盤整備と観光

まちづくりの拠点となる公共施設や道路網・公共交通機関などを整備し、都市機能の充実を図るとともに、情報通信基盤を整備し、



親子が安心して遊べる交流施設「子育てプレイルーム」

地域情報化を推進していきます。特に、JR上野原駅・四方津駅の周辺整備や旧町村を結ぶ新天神トンネルの早期完成、地元新鮮野菜の販売が定着した中央自動車道談合坂SA

へのスマートICの設置、交通弱者に対する地域公共交通の実証運行への取り組みなど、大規模な事業を推進しています。

このような基盤整備を推進する中で、新たな観光資源の開発や地域資源のブランド化、グリーンツーリズム、二地域居住の促進に取り組んでいます。現在、山梨県・大月市・JR東日本と協働で、JR上野原駅から隣接する大月市の笹子駅までの8駅を拠点に、それぞれのトレーニングコースを活用し、首都圏の誘客促進に取り組む「県東部JR8駅トレーニング推進事業」を実施しています。

まちづくり・地域づくり

住民が積極的にまちづくりに参加できる仕組みづくりを構築するとともに、地域が均等に発展でき、それぞれの意見を反映できる体制づくりを行っています。そのため、自治基本条例の制定検討や住民活動の支援を積極的に行っています。また、事業の効率化、体制のスリム化などによる行財政改革の推進や情報基盤の活用による開かれた行政運営を図っています。今、厳しい時代の中、市民は変



上野原市長 江口英雄



【市町村合併】平成17年2月13日、上野原町と秋山村が対等合併
【特産品】酒まんじゅう、ひなつる漬、ユズワイン、長寿こんにやく
【観光】大ケヤキ、軍刀利神社、大野貯水池、月見ヶ池、扇山、高柄山、三頭山、権現山、八重山、坪山
【イベント】蚕種石神社祭り(4月)、月見ヶ池弁財天祭り(7月)、無生野の大念仏、秋山ふるさと祭り(8月)、牛倉神社例大祭、上野原トレイルレース(9月)、西原ふるさと祭り、桐原長寿の里まつり(10月)、上野原市駅伝競走大会(1月)

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

温泉・癒し・イノベーションで、 新生熱海を創る

はじめに

熱海市は静岡県の最東端、伊豆半島東側の付け根に位置し、東方は相模灘に面し、西南北の三方は箱根山系の山で囲まれています。北東には千歳川を県境として神奈川県湯河原町と接し、海上約10kmには県下唯一の離島初島があります。温暖な気候と豊富な温泉資源、海山を有する風光明媚な自然景観に恵まれ、観光温泉都市としてのその地位を固めてきました。

その昔、海底から熱湯が湧き出したところから「熱海」という名が付いたといわれており、古くは徳川家康が湯治に来熱し、四代將軍徳川家綱のころには「御湯湯」として温泉を江戸城へ献上したという歴史を持ちます。また、明治維新後には温泉を背景に近代文豪や政治家、著名人たちの来湯により繁栄を迎えました。江戸・東京の奥座敷として発展してきた本市ですが、観光地として大きな変革を遂げるきっかけとなったのは、昭和9年の丹那トンネル開通でした。全国から多くの観光客が集まり、大衆化し、新婚・社員旅行のメッカとなりました。その後、バブル経済の崩壊後は、個人客、カップル、家族連れなどの観光客が目立つようになってきています。

財政危機宣言 熱海再生への道

私が熱海市長に就任した平成18年9月当時、本市の財政状態は非常に悪化しており、すぐに財政再建に取り掛からなければ財政再生団体への転落は免れない状況でした。熱海の早期再生のために、また

治家、著名人たちの来湯により繁栄を迎えました。江戸・東京の奥座敷として発展してきた本市ですが、観光地として大きな変革を遂げるきっかけとなったのは、昭和9年の丹那トンネル開通でした。全国から多くの観光客が集まり、大衆化し、新婚・社員旅行のメッカとなりました。その後、バブル経済の崩壊後は、個人客、カップル、家族連れなどの観光客が目立つようになってきています。

市民の皆さんに本市の危機的な財政状況を分かりやすく公表するために「熱海市財政危機宣言」を就任直後の平成18年12月に発しました。折しも夕張市の財政破たんを端を発した財政健全化法の施行もあり、早急に財政再建を進めることが至上命題となりました。平成17年決算時に試算したところ、連結実質赤字比率が全国でワースト6位にランクされるような状況でしたが、徹底した内部管理経費の削減や大型の公共事業の一時凍結、上下水道料金の値上げをはじめとする受益者負担の適正化を進めることにより、就任から4年目で、約41億円あった不良債務額を半分に減らすことに成功しました。平成22年度から就任2期目に入り、凍結していた公共事業などがやっと再スタートできる運びとな

り、今後は徐々に「元氣な経済」と「豊かな暮らし」の実現に重点を置き、市政を担っていきたくと考えています。

本年3月11日に発生した東日本大震災は、その日を境に安全・安心に対する国民の認識が一変するほどの大きなつめ跡を残すものでした。津波や原子力発電所の事故による直接的・間接的な被害は日本経済と国民生活に未曾有の大打撃を与えました。

私も震災直後の4月中旬に福島県川俣町に現地入りをし、本市には多くの旅館やホテルがあり、避難所に身を寄せる方々をいつでも受け入れる用意がある旨をお伝えしました。観光地である熱海市としてできることは何だろうか。私は温泉観光地には人の心と体を癒す力があると思っています。震災

により傷ついている人、復興に向けて懸命に頑張っている人、そして不便や不安な生活を強いられるいるすべての人たちが、一息つき、ほっとできる癒しの場を提供することが観光地である熱海市の使命であると考え、「癒そうニッポン！」あたみ頑張る宣言」を行いました。

熱海ブランドの再構築と 長期滞在型の世界の保養地 現代の湯治場を目指して

熱海は古くから温泉とともに歩んできました。そしてこれからも、熱海が世界に誇れる地域資源は温泉だと思えます。

温泉を中心に据えながら熱海市域に存在するさまざまな魅力や資源を活用することで地域活性化を図ることを目的に「温泉イノベーション」戦略を掲げました。具体的には、「温泉熱を利用した低温度差発電の実現化研究」や、「ICT活用によるシティブロモーションの推進」などが挙げられます。

熱海には幸いなことに高温の源泉が豊富にあり、現在、慶應義塾大学環境情報学部の武藤佳恭教授にご協力いただき、プロジェクトを進めているところです。中でも、温度差発電については震災後、環境に優しい電力としてマスメディアからも注目を集めています。また、将来的にはこの新たな発電方法により市民にもその利益を還元していただけるのではないかと期待しています。



大型の旅館・ホテルが立地する「東海岸町地区」(重要景観形成地区にも指定)

温泉文化を再認識するとともに、まちないたるところで温泉情緒を体感できるようになまちづくりを進めていきたいと考えています。その上で、時代のニーズに合わせた新たな魅力を付加し、「現代の湯治場」を目指しています。

平成22年9月に、

温泉を中心にした取り組みは、温泉資源の発掘のみならず、市民によるなまちづくりにも影響を与えました。具体的には、「まち歩きガイド」の育成や「熱海温泉玉手箱(オinatama)」と銘打った地元体験型イベントの実施です。市民自身が熱海の魅力を再発見することは、来

プロフィール

- ◆ 面積 61.6 km²
- ◆ 人口 3万9810人
- ◆ 世帯数 2万1371世帯

〔将来都市像〕「住むひとが誇りを訪れるひとに感動を 誰もが輝く楽園都市 熱海」

〔まちの特徴〕静岡県最東端、伊豆半島の玄関口に位置する温泉資源と自然環境に恵まれた観光都市

〔特産品〕橙、七尾たくあん、トコロ



熱海市長 齊藤 栄



昭和27年から開催し、今年で60年目を迎えた「熱海海上花火大会」

テン、イカメンチ、ひもの
〔観光〕熱海サンビーチ、長浜海浜公園、起雲閣、マリンスパあたみ、初島熱海梅園、あたみ桜、澤田政廣記念美術館、熱海芸妓見番歌舞練場
〔イベント〕熱海海上花火大会、熱海こがし祭り・山車コンクール、熱海梅園梅まつり、糸川さくら祭り、熱海温泉玉手箱(オinatama)、熱海をどり



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

「次世代に誇れる南さつま市」を 目指して

はじめに

薩摩半島の西南端に位置する南さつま市は、白砂青松の吹上浜と、変化に富んだ美しいリアス式海岸を有する、豊かな自然にはぐくまれた歴史と景観のまちです。国道226号沿線の「南さつま海道」では、東シナ海に沈む夕日や、国指定名勝「坊津」などの絶景に加え、鑑真大和上が上陸した「秋目」や、対外貿易の要港として栄えた坊津の町並みを楽しむことができます。また、市の中心部にある竹田神社には、「いろは歌」で有名な薩摩藩島津家中興の祖として知られる島津忠良(日新公)が祭られ、周辺には武家屋敷も残されています。

吹上浜砂の祭典

「吹上浜砂の祭典」は、日本三大

ど、多くの団体が大会や合宿で本市を訪れています。

南さつま市街地から車で10分の距離にある県立吹上浜海浜公園周辺には、天然芝6面、人工芝2面、合わせて8面の九州でも有数のサッカー場を有しています。また、陸上競技場や体育館、テニスコート、武道館、全天候型のかせだドームやグリーンドーム金峰など、数多くの豊富な運動施設が整備されています。また、施設周辺には、合宿用の宿泊交流施設や民営の宿泊施設も充実しています。

また、平成22年度からは、新たに「スポーツ合宿奨励金(合宿等誘致促進奨励金)制度」を創設し、本市で合宿を行う団体・チームなど



サッカーをはじめ、多くのスポーツ大会や合宿が繰り広げられる

砂丘の一つ吹上浜の自然あふれる海浜部を生かしながら地元資源を活用し、地域の活性化と環境保全を目的として、四半世紀にわたり開催されているイベントで、砂の芸術「サンドクラフト」による砂のオブジェを制作展示することで、毎年多くの人出でにぎわっています。

このイベントで訪れた人を魅了する砂像の制作には、市民団体や各種民間団体など多くの市民が参加し、市民の英知と活力を結集し、市民総出で砂像をつくり上げていきます。

また、砂像を通してさまざまな情報を全国に発信し、砂浜を有する全国の多くの自治体と日本砂像連盟を結成するなど、人を介した多様な交流が活発に行われています。



東日本大震災の災害復興支援イベントとして開催された「2011吹上浜砂の祭典」

本年の「2011吹上浜砂の祭典」は、世界の砂像彫刻のトップアーティスト8名を招待して「砂の彫刻世界選手権大会」を開催するとともに、東日本大震災の災害復興支援イベントとして位置付け、5月1日から15日までの期間で開催しました。吹上浜の壮大な会場では、青い海と松林と砂像のコラボ

レーションが、15万6000人の来場者を魅了しました。

このように九州有数のイベントとして成長した「吹上浜砂の祭典」は、来年で25周年を迎えます。人と自然が調和した環境に優しい魅力あるイベントとなるよう、より一層創意工夫し、本市のにぎわいづくりとダイナミックな産業おこしへの挑戦を続けたいと考えています。また、熟練した砂像制作技術を通して、砂の文化を全国に発信してまいりたいと考えています。

スポーツ観光の推進

本市のスポーツ合宿人口は、ここ3年間で2倍近い(平成18年度…約8000人↓平成21年度…約1万5000人)伸びを示しています。これは、鹿児島県の合宿人口の約16%に当たり、県内で1番の合宿人口となっています。国内各地の大学や高校のサッカー部をはじめ、陸上や駅伝のクラブチームや韓国の大学、プロ野球チームな

の宿泊費等を助成するなど、積極的な合宿誘致に取り組んでいます。九州の南西に位置し、恵まれたトレーニング環境(年間平均気温19℃、充実した温泉保養施設や豊富な食材など)とダイナミックな景勝地を有する本市で、大自然を取り入れた本格的なスポーツトレーニングに皆さんも励んでみませんか。

さらなる行財政改革の推進

本市においては、計画的な職員数の削減(合併当時から5年間で136名の職員を削減を図るとともに、福祉施設や保育所などの民間移譲を積極的に進め、行政改革大綱に定める「協働による効率的な市政」を達成するため、これまでも聖域なき行政改革に取り組んできました。今後も、確実に直面する地方交付税などの大幅な減収を克服し、自らの責任において、将来にわたって必要な行政サービスを提供することができる、持続可能な財政構造を確立していかなければならないと考えています。

昨年12月に策定した後期の集中改革プランと財政健全化計画の着実な実施により、職員定員のさら

なる適正化(人口1万人に対して職員100人)と、「民間にできることは民間へ」を基本に、公的施設の民営化などに向けた検討を積極的に進めていかなければなりません。また、現在269ある自治会の再編や自治会担当職員の配置による「市役所出前サービス」の実施など、市民に優しい市役所づくりや予算ゼロ事業にも積極的に取り組

んでいきたいと考えています。

改革の痛みを市民に素直に語りつつ、また、市民目線と現場主義による改革と再生の取り組みを継続しながら、「次世代に誇れる南さつま市」の実現に向けて、改革力、地域力、人間力、産業力のパワーアップを目指してまいりたいと考えています。

プロフィール

- ◆面積 283・37km²
- ◆人口 3万8947人
- ◆世帯数 1万8699世帯

〔将来都市像〕地域躍動きらめく「南さつま」

〔まちの特徴〕鹿児島県薩摩半島の南西部に位置し、東シナ海に面した自然豊かな景勝地

〔市町村合併〕平成17年11月7日、旧加世田市、旧笠沙町、旧大浦町、旧坊津町、旧金峰町の1市4町が合併

〔特産品〕焼酎、きんかん春姫、砂丘



南さつま市長 本坊輝雄



らっきょう、かぼちゃ、金峰コシヒカリ、ちりめん、たかえび

〔観光〕鑑真上陸の里「秋目」、島津家中興の祖「日新公」を祭る竹田神社、南さつま海道八景、万世特攻平和祈念館、県立吹上浜海浜公園、マリinjヤ

〔イベント〕吹上浜砂の祭典、竹田神社夏祭り、「薩摩・坊津」岬まつり、マリjランド笠沙フェスタ

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。